

1. わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。(15:1-2)
 - a. ここでもまた、天国で使われる言葉や文化を垣間見ることができる。イエスが弟子たちに話されるメッセージは比喩、歴史、神秘に富んでいる。イエスがぶどうの木で父なる神が農夫で私たちが枝とはどういう意味なのだろうか？ こんなたとえを使う人が他にいるだろうか？ しかし神がこのように話されるのだからいずれ天に住む私たちもその意味を理解する必要がある。
 - b. 歴史的にも「わたしはある」という表現はおなじみだろう。それは燃える芝の中で神がモーセに現れた時に使われた名前である。ヨハネの福音書の中でイエスは繰り返し「わたしは…である」と宣言されているが、ここでも「わたしはぶどうの木」と言われている。
 - c. イスラエルの歴史を顧みると、ぶどうやぶどう園は彼らに約束された土地でもっと特色のあるものであった。「わたしはまことのぶどうの木」とは、イエスの神性宣言であるとともに神の民に対する約束の成就を表している。
2. あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことによって、もうきよいのです。わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。(15:3-4)
 - a. 「あなたがたはもうきよい」とはもっと実を結ぶために神が刈り込みをなさるというショッキングな啓示を指しているのかもしれない。イエスが弟子たちに実を結ぶための過程を教えられた時、彼らは恐れたことであろう。刈り込みは突発的で荒々しい行為だが、より多くの実を結ぶために不可欠である。
 - b. しかしイエスは「あなたがたはもうきよいのです」と弟子たちを安心させる。これはすでに刈り込みがされていて実を結ぶ時期に来ているという意味である。
 - c. 実を結ぶための秘訣は簡単で、ただイエスにとどまることである。私たちが実を結ぶかどうかはただその行為のみによる。ここでの「実」とは御霊の実のことであろう。
3. わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。(15:5-6)
 - a. 私たちは自分だけの力でどこまでできるだろうか？ イエスは「わたしを離れてはあなたがたは何もすることができない」とおっしゃる。神は私たちの人生がどんなに良く見えるかとか人生でどんなことを達成したかとかいうことではなく、イエスにとどまった状態で何をしたかということをご覧になる。
 - b. 私たちの人生も気を付けていないと意味がなくなってしまう。コンセプトは単純である — イエスにとどまっていれば良い。しかし実際にイエスが「わたしにとどまりなさい」とおっしゃり続けたらどうだろう？ つねに実行できるだろうか？
 - c. イエスにとどまる際に乗り越えなければいけない大きな関門はおそらく刈り込みの過程であろう。刈り込みは痛みを伴う。神は私たちを豊かな実を結ぶ人にするため、その尊厳ある計画の一環として試練も与えるのである。
4. あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。(15:7-8)
 - a. しかし私たちが試練に耐えイエスにとどまり続けるならすばらしい約束が待っている。「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」
 - b. イエスが、「とどまること」「試練に会うこと」「祈ること」を話される時にはおもしろい相関性がある。私たちが刈り込みをされる(きよめられる)/試練、実を結ぶ/御霊の実、そしてその過程は何度も繰り返される。キリストに似た人格や性質が培われ、私たちの祈りは神のみこころそのものとなり、それは不思議な形で応えられる。祈りが神のみこころと一致した時にそれは聞かれるのである。
 - c. イエスの真の弟子とはこのようなものである。イエスにとどまり、イエスに信頼し、イエスと共に試練を通り完全にされた者を通して父なる神は栄光をお受けになる。